好色

或る日のこと、僕は実に奇妙な郵便を、いや、奇妙なと云うよりも甚だしく不謹慎な郵便物を受け取った。（あなたにとってエロスとは何でしょう？）（現在でも性欲はありますか？）（その処理はどうしていますか？体験談があれば具体的にお聞かせください。）などと云う大胆極まる設問内容である。やぶから棒にそんなことを訊く送り主はどんな人物かと思った。当然、僕はその郵便物の差出人を確かめた。或る大学名が印刷されている。歴とした大学である。冒頭の挨拶には、突然の失礼を詫びながら、大学の文化人類学研究会、リベラルアーツ学群代表、三年生〇〇〇〇の女性名が印字されてある。リベラルアーツの語源は、自由自在な生き方、と申しまして、私たちはゼミで、七十歳以上の高齢者（男性）のエロス、性愛などを研究している二十名ばかりのメンバーです、と書かれていた。差し支えなければこの問いにお答え戴ければありがたい、変態や好色じみた性を興味本位に取り扱うものでは決してないこと、高齢者の性の実態を詳らかにすることによって人生の後年の糧になる手がかりを学問的に考察している学生たちであることをご理解いただきたい、一ヵ月以内で構わない、無記名でのご返事をお願いしたいのです、と結んであった。

そうは云っても出し抜けに、しかも見ず知らずの相手にこのような質問は失礼じゃあないか、と云う気持ちが起こった。唐突に、枕絵を見せられたような当惑が拡がる。それと、どうして僕が彼女等の対象になったか、住所は何処で知ったのかとの疑問もわいて来た。まさか、住民基本台帳あたりを不正入手して年齢漁りをしたのでもあるまい、それで企画を進めたわけでもないだろうが、と思った。まあ、色々詮索しても始まらない、打っちゃっておこう、二十そこそこの学生たちの態の好い実験材料にされたら適わないという気持ちが頭を掠めた。まったく、バカバカしいことじゃあないか、年寄りをからかうのもいい加減にしろ、と。

そんな不快も忘れていた三ヶ月くらい後、僕は再び彼の大学の彼の女学生からの郵便を手にした。くどいなあ、どうせ碌でもないことだし、そのまま同じように屑籠へ捨ててしまおうと思った。が、まあ、見るだけ見てもいいだろうと僕は開封したのだ。そこには、先は、本当に失礼を申し上げたこと、決して悪戯やフザケ半分でないことをご理解戴きたいと丁寧な詫び状が入っていた。さらには、男性及び女性高齢者五十名づつの百名を、或るリストから選び出し協力を得たお

陰で非常に良いヒントを与えてもらえたこと、貴重なデーターを集められたことなどと共に、お気を損ねる無礼があったら重ね重ねお詫び申し上げます、又、追加の研究が生じた場合、ご協力を承りたいをお願いしたい、取り敢えずありがとうございました、と締めくくられていた。それを読んでいると学生の真摯さが少しは透けて見えた。しかし、無記名とは云うものの、こうしたアンケートに返事を出すのは僕以外でも、大方の男女高齢者たちも戸惑いがあったに違いない。無論、高齢者の性愛やエロスに・・・個人的に関心がないことはない。肉体が衰えても気持ちはまだまだ若い。エロスは休火山のごとく僕の内部にも燻っている。昔の婦人の言葉にだって、死して灰になるまで！がある。おいそれと冗談にでも口に乗せることは出来ない意識下の性愛とかエロスの問題、焼けぼっくいに火が付いた感じがしないでもない。この学生たちの問い掛けを切っ掛けに、ちょろちょろと蠢く、厄介な僕の好色に向き合うことも必要かも知れない。アンケートの結果も知りたい、ふと、そんな気分も萌している。同世代の高齢者達の性の意識を覗いて見たい！

足利時代の宗教家、蓮如は二十八歳の一子誕生から、八十歳で二十四子を、八十一で二十五子、八十三で二十六子、八十四で二十七子を、四人の夫人との間に大勢の子を儲けている。同時代、蓮如より二十歳年上の有名な一休禅師は七十七から八十八歳の晩年にかけて盲目の森女と同棲していた。良寛和尚には貞心尼との相聞歌がある。世間に流布するこの偉大な先人たちのエロスに想いが跳ぶ。近年では、バカヤロウ解散で名高い大磯在住の総理大臣（故人）が若い女性と同衾していたという風聞も伝えられている。東南アジアやヨーロッパへ物見遊山する一部の男性たちは売春婦や公認の飾り窓の女（魔窟）へ趣くと聞く。ご婦人はどうであろうか？仄聞するところによれば女性でも七十代の娼婦がいた。さらには九十代の女優が若いツバメを持っているという噂も多分に聞く。

人が生きると云うことは・・・とどのつまり、食と性である。婦人たちが、死して灰になるまで！と囁いたように男性たちも然りである。

愛しい人、好きな人に触れたい、触りたい、抱きしめたい、愛撫したい、と考えるのはごく自然な感情である。陶酔と歓喜、・・・亡妻、亡夫を忘れがたいという御仁はそれはそれで結構である。人は死の間際までエロスに拘らなければいけない。そうして、秘かに心をトキメかせなくてはいけない。

老人のそれらを、醜悪と呼ぶか、劣情極まりない奴と後ろ指を指すか、好色は下品であるか。

戦後では高齢者のエロスは谷崎潤一郎に代表される（鍵）や（瘋癲老人日記）の壮絶な作品にも見て取れる。（眠れる美女）川端康成の作品もそうだ。永井荷風が日劇のストリップ劇場の楽屋裏で裸の踊り子達と遊んだのは記憶に新しい。明治時代、夏目漱石の友人の京都大学文科学長狩野亮吉博士は、学究の道から市井の書画骨董屋に転身、多くの秘画、春画を収集した。又、閨房小説もずいぶん書いたらしい。終局、人の心の底に澱むエロスの感情と感覚は古代から計り知れない。このことは東西においても同様である。イタリアの前首相のような富豪であれば金にものを言わせる豪の者も存在するからだ。

謹厳実直な高齢者は、いまさら何を、と宣うだろう。もうこの歳では、体力もない、そんなバカなことは卒業、卒業、とせせら笑うかもしれない、・・・破廉恥、体裁、道徳、そんな倫理攻撃の定見があちこち四方から聴こえて来るようだ。あるいは、糖尿でそんな気持はさらさら起きない、などと逃げを打つ輩もいる。抑えがたい回春の方策は誰もが秘かに模索しているのだ。金で解決するのが一番手っ取り早いのは知れている。パソコンやDVD全盛の今は、手軽に鑑賞することで慰みを得ている高齢者もいるのだ。

ああー、いやらしい、だから、男性はイヤ！、との世間の婦人たちの声はかまびすしい。私たちは精神的な恋愛をしたいのよ！と呟く艶やかな声々。

僕は己の青春時代に経験した好色を思い切ってここへ披露することにした。以下。・・・

＊　＊　＊

その日も朝からムシムシした一日だった。湿度が高くて動くと直ぐにベトベトと汗が滲んで来る。ズボンのポケットに入れたタオルで汗を拭うのがひっきりなしであった。半袖を着て僕は電車に乗っていた。親戚に一寸挨拶に赴く予定だった。その年の四月に浪人する破目になった僕は、下宿の保証人に杉並在住の叔母にお願いをしたのだ。叔母といっても母の従姉妹にあたる遠縁の人で三月に一度訪ねているから夏休みは二回目の訪問である。叔母の家は、京王井の頭線、永福という駅で下車する。渋谷と吉祥寺駅の中間で沿線は畑や雑木林があって今では想像もつかないのどかな風景が展開していた。当時はまだ急行も無かった。

午前十一時頃に渋谷駅からの始発に乗ったような気がする。平日の昼近くだから車内は空いていた。乗客は子供連れや年配の主婦という女性が多かった。僕は岩波の文庫本を一冊持って出発を待った。文庫本は、はっきり覚えているが漱石の（こころ）である。田舎の友人からプレゼントに貰ったものだ。けたたましい

発車の合図で電車がホームを走り出す。座席でパラパラとページを開いた。しかし、前夜遅くまで聴いていたラジオのせいで睡眠不足な僕に猛然とした眠気が襲ってきた。車内は現在のように冷房など無い。各車輌が窓を開けて涼風を取り込んでいるだけだ。天井から大型の扇風機が羽を回していた。相変わらず汗はじっとり、べったりとねばっこく浮き出る。車輌の振動と共に僕は目を閉じて軽い転寝に入った。ガタン、ガタン、ゴー、電車が揺れるたびに、僕ははっとする。うつらうつらと舟をこいでいるのが自分でも分かる。東京へ行ったら居眠りでも口だけは開けてはいけないよ、と田舎の母が戒めたことを思い出しながら堅く唇を結んでいた。次の駅で誰か隣りに座ったようだった。僕は目を閉じたまま、それが女の人であることを直感した。座席への座り方が静かだったことと微かだが微量な好い香りが伝わったからだ。清潔、清楚、と口にしたいような快いものが伝わって来た。僕は直ぐに目を開けようとした。だが、それより早く・・・お隣さんの腕が僕に強く触れたのである。押し付けるような感じであった。最初、僕はお隣さんのその無神経さにちょっとイヤな気がした。初めの印象が崩れてしまいそうだった。同時に文庫本が膝から滑り落ちそうになる。それも気配で分かる。目を開けようかどうしようか迷っていると、ガクン、ガクンと電車が緩いカーブに差し掛かった。途端、お隣さんが大きく僕に寄って来た。いや、寄るというよりも明らかに上半身が凭れ掛かって来る。シャツの僕の腕に肌がべったりくっ付く。疑うこともない程のやわらかな女性の腕である。目を閉じている僕は、どきっとした。僕の肘から上にその人の素肌がきつく重なったのである。しらばっくれて僕はその状態をそのままにした。俯き加減で居眠りを装っている。肩辺りはお互いのシャツの触れ合いだから剥き出しの肌のべったりした感覚はない。それだけに、わずかであるが肘上の皮膚の触れ合いが僕を刺激する。吸い付いたように離れないのだ。なんだ、この感触は！と思考した。今まで女性の肌と、このようにしてピッタリと重ね合うことなどはまったく無かった。初めての経験だ。夢の中、白い裸体を撫で廻しているような感じである。胸はドキドキドキと早鐘を打つ。柔肌が一向に僕から離れないのだ。すーっと離れそうになると再び揺り戻しが来て僕らは触れ合っている。エロチックが僕を虜にした。どんな女だろうか？猛然と見てみたかった。だが、早まってはダメ、と入れ知恵がはたらく。目を開けた途端、お隣さんはさーつと腕を離してしまいそうな予感もする。そうだ、居眠りを続けるに限る、そうして、このゾクゾクするような肌の触れ合いを愉しめ、と脳が指令する。ガクン、ガクン、ガクン、ゴー、ゴー、お隣さんは序々に

強く押し付けて来る。ひょっとして、これは偶然だろうか。僕は一計を巡らした。だらりと膝へ落とした両腕から手の中の本を抱えるように腕を組み直したのだ。座禅を組んでいるような容(かたち)で両腕がくの字になる。そうすることで、僕の左腕(ひだりうで)はだらりと下げている以上に強く触れ合う訳だ。イヤであれば、当然お隣さんは僕の左腕を避けるだろうと計算がはたらく。僕は目を瞑(つむ)りながらそれを実行した。しかし、どうだ・・・相変わらず肌は離れない。タコの吸盤のように離れない。僕は内心わくわくしながらちょっぴり反応を確かめる、吸い付いている肘を揉むような動作をした。すると、お隣りさんはそれさえ受け入れてくれたではないか。僕が或る微妙な意志を感じ取った瞬間だった。彼(か)の女(ひと)もこの肌の触れ合いを楽しんでいる、偶然を装いながら若い僕と戯(たわむ)れている、そんな確信だった。ますます、その人の顔を見たくなった。僕は電車の駅での停車も上(うわ)の空で、どういう切っ掛けで目を開けたらいいか思案した。極々(ごくごく)自然に目を開かなくてはならない、それから、さりげなくお隣さんを盗んで見る・・・。

ドヤドヤと大勢の客が乗り込んだようだった。それを潮(しお)に僕は薄く目を開いた。それからおもむろに車内から停車駅のホームをボーッと眺めた。この際はポカンとした演技も必要だ、続いて車内の様子も見渡した。座席は満席だが真向かいの乗客も僕らの触れ合いに気が付かないようだった。ここで僕は目を水平にする。その僕の水平の隅(すみ)の視界にお隣さんが映っている。白いワンピースの女性だ。年齢は分からない。が、どうやら若い女性では無さそうである。正面からでなければはっきりしないがメガネをかけた中年の人らしい。僕が目を覚ましたことに一瞬、気がついたようだった。その瞬間、腕の触れ合いの感触が無くなった。すーっと腕が離れていく。しまった、僕は内心、落胆した。けれど僕は心の動揺を頬(ほお)かむりで繕(つくろ)った。相手も充分知っている、この遊びを、僕はそう踏んだ。幸いにも彼女はまだ下(お)りる気配は無かった。僕は又、目を閉じ腕を組んだ。再び、彼女からの凭れ掛けを期待する・・・ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、ガタン、電車は僕の予想を抱えて徐々にスピードを増す。案の定、彼女はまた僕に寄り掛かって来たではないか。喜びが僕を占領する。肘上の白い肌が相変わらず僕に触れて来る、くっ付いて来る、前より激しくショートするような具合で。・・・なにか、それは表現できないようなエロチックな感じだった。当時、僕は不幸にしてまだ女性を知らなかった。しかし、この感覚は目くるめくような・・・切ないほどの甘く恐ろしい快感があった。ほんのりした薄明かりの中で女性を思う存分、陵辱(りょうじょく)しているような妄想だった。それが目を閉じた僕の頭にえんえんと広がっている。

生まれて初めて味わう僕の性の饗宴、・・・そうして、彼女も又、この歓喜に打ち奮えているような錯覚さえ、ピクン、ピクンと伝わるのであった。

僕は到頭、永福駅での下車を忘れてしまった。いや、忘れたというよりもこの忘我の魔力に襲われていたのである。終点の吉祥寺駅まで僕の妄想は続いた。彼女は吉祥寺駅で下車する時、立ち上がりしなチラッと僕を見た。俯いていた僕もすかさず目を送った。四十代の女性の勘が当たっている、眠たそうな細い目に丸メガネを掛けて何処にでも居そうな女の人だ。もう、結婚して子供さえ居そうな感じがする。刹那、彼女のレンズの奥で何ともいえぬ羞恥が浮んだのを僕はキャッチした。そして、眸に動揺が走った。それは、僕との融合への些かの後悔だろうか、あるいは一時、密かに愉しんだ愉悦への恥じらいだったのか。・・・束の間のエロスの交換は終了した。僕は彼女を追いかけて声を掛けたい衝動に駆られたものだ。（お茶でも飲みませんか・・・）そんな気の利いた口は、ぽっと出の田舎青年の僕に利ける訳がない。改札を過ぎて行く白いワンピース姿を目で追いながら口を吐いたのは、ああ！であった。大人の女性の前で立ち尽くしてしまった僕の初陣のエロスは・・・溜め息で完了した。

永福町へ戻らなければならない、急かせるように再び同じ車輌へ腰を下ろす破目になった愚鈍な十九歳の僕である。